



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

私が大学院を修了したころのかれこれ25年くらい前の話であるが、毎週水曜に
ある小さな病院の当直に行っていた。院長は大変人情に厚く、私が尊敬する先生の一人であった。

ある夜、入院患者で確かが
んの末期であったと思うが、状態の悪い患者さんが「畳の上で死にたい、家に帰りたい」と言っているのを聞いて、看護師から「おかしなことを言っているよ」と言われて、家族の方も連れて帰りたいとのことである。全身状態が悪く急変の可能性もあったが、「本人とご

家族が強く希望されているとともに、おっしゃっていることはもっともだと思っ
た。私の一存では決められ

〈2〉畳の上で死にたい

ないので院長に電話し、状況を説明したところ「帰してあげなさい」と言われた。

明け方になってその患者さんのお宅から「今しがた亡くなった。近くなので死亡の確認に来てほしい」と電話があった。院長に電話すると、行って来いとのことである。患者に連絡をし、病院の玄関に白いベンツが現れた。私がベンツに乗ったのは、後にも先にもこの時と先輩のベンツに乗せてもらった時だけだ。私は白衣を着たまま聴診器を持って、一人の看護師と共に後部座席にちよこんと座った。ベ

ンツは、夜が白んできた下
かめ「残念ながら、確かに
お亡くなりになっているこ
とを確認しました」と家人
に告げた。

私が1990年代の中心に留学していたときの恩師であるアメリカ人の教授と私は、私が帰国後もよくお互いの家にホームステイし、いろいろな話をするが、彼は私の家で畳の上に寝るのが快適だそう。シャワーを1日に朝晩2回浴びる彼は、日本のお風呂も大好きである。ただし、その月の水道代が桁違いに高く家内がびっくりしたことを思い出す。

私も畳の上に寝るし、死に際しては家族に囲まれて畳の上で死にたいと思う。今まで、仕事中心で家族をあまり顧みることがなかったが、現在大いに反省している。

患家の奥の間の畳の上に横たわっている患者さんの顔は、やつれてはいるが何となく安心したような表情に見えた。聴診器を当て、心停止と呼吸停止を確認するとともに瞳孔の散大も確認